EAPEA
ニュースレター
2014 年 1 月 10 日
第 6 号

発行元：NPO 法人東アジア政経アカデミー
発行元連絡先：〒168-0082 東京都杉並区久我山 4-38-14 電話：03-3332-8481 FAX：03-3332-8433
URL：http://www1.ocn.ne.jp/~eapea/ e-mail：eapea@diary.ocn.ne.jp

この号の内容

1 ■相互依存の日韓関係（永野慎一郎）
2 活動報告①
■「石塚輝雄前板橋区長講演：私の体験と国際交流」（松浦 勉）
■日韓トンネル研究会講演
■中央日韓協会講演
3 活動報告②
■木浦大学と日韓共同ワークショップ
■陸地棉試作地木浦高下島訪問
4 活動報告③
■第 7 回日韓政策フォーラム
■木浦市立舞踊団大阪公演
会員からの便り①
■「普通」の人間と「普通」の国家（申 景浩）
5 会員からの便り②
■サハリン紀行（日向寺淳一）
6 会員からの便り③
■心の故郷（ふるさと）江景の家（薄葉威士）
■韓国の恩師と兄貴の来日（佐々木憲文）
編集後記

相互依存の日韓関係

東アジア政経アカデミー代表 永野慎一郎

日本と韓国は隣国であるだけでなく、価値観を共にする友好国です。両国は2000 年以上の交流の歴史があり、長い歴史の中で不幸な時代もありましたが、友好的な時代が長く続きました。古代から近代に至るまでは大陸文明を日本に伝来したのは韓国の知識人たちでありました。

20 世紀前半における日本の植民地支配から起因している歴史問題が未だに尾を引いています。歴史問題を曖昧にしたまま国交を正常化したので、そこから派生するさまざまな問題が現在両国関係を不正常にしています。

日韓関係は相互依存関係であります。戦後日本の経済復興の契機を作ったのは、1950 年に勃発した朝鮮戦争でありました。朝鮮戦争は日本にとって「恵みの雨」でありました。政治的には連合国の対日講和会議を急がせ、名実共に独立国となりました。経済的には戦争特需によって自立経済を確立したのです。

トヨタ自動車が最も恩恵を受けた企業でありました。GHQ の占領下で倒産の危機に直面していたトヨタ自動車を救済したのは戦争特需でありました。「米軍からの特需という神風に恵まれ、倒産寸前のトヨタは、大きく息を吹き返した」と当時の石田退三社長が社史で書いています。

1960 年代、朴正熙大統領が産業化を始めた時、重点的な課題が綜合製鉄所建設でありました。当時、日本側は浦項綜合製鉄所建設に否定的でしたが、日本の政治指導者および財界、特に鉄鋼業界を説得し、建設に多大な貢献をしたのは安岡正篤という人物です。安岡正篤は戦後日本の政界・財界・官界に強力な影響力を持っていました。戦後日本の「歴代首相のご意見番」「政財界の指南役」として知られていた人物です。

安岡正篤はナショナリストであり、保守主義を代表する知識人でした。安岡は高い次元で国益を考え、さらに上の次元で両国の将来を考えていた人物で、目先の利益を追求するのではなく、広く、深く、長期的にものを考える思想家でした。安岡は浦項綜合製鉄所建設への日本の協力は、韓国への支援であるだけでなく、それが日本の国益にとって有益であると判断したのです。浦項綜合製鉄が韓国経済発展に多大な貢献をしたことは周知の通りです。韓国経済の急成長によって最も利益を得たのは実は日本であります。

過去のある時期に行なわれた行為に過ちがあったとすれば素直に認め、解決に努めるべきで、負の遺産を次の世代にまで引きつかせるべきではないと思います。同時に寛容な気持ちをもって二度とそのようなことが起こらないように確認し合い、未来志向の関係構築に努めることも重要です。このような認識に立脚し、両国民間の信頼関係を構築することが最も重要であります。信頼関係はお互いが相手方を尊敬することから始まります。

日本人と韓国人は似ているようで、実は違うところもあります。お互いに相手の本当の心を知らない故にしばしば誤解が生じるのです。まず交流し、心を開いた付き合いをする必要があります。その中で理解し合う関係になります。本日の大会がこのような関係構築のきっかけになることを希望いたします。

（本稿は、2013 年 11 月 16 日、日本プレスセンターで開催された「2013 日韓平和シンポジウム」での永野慎一郎代表の挨拶内容です。）

活動報告①

「石塚輝雄前板橋区長講演：私の体験と国際交流」

前板橋区福祉部長　松浦　勉

２０１３年４月 20 日、当アカデミー総会に合わせて石塚前区長の講演が行われた。

筆者は、前区長には助役時代を含め部下として約 30 年間指導を受けた縁があり、その卓越したリーダーシップ、謙虚で誠実な人柄や人への細やかな気遣いを間近に感じてきた者である。今回、永野理事長と石塚氏との間で講演実現の橋渡しをさせていただき、誠に感慨深いものがある。

今回の講演は、石塚氏の体験的国際交流論がテーマに掲げられ、他の自治体の目標とされた板橋区の国際交流施策の展開経過が、その推進役であったトップから明らかにされたといえる。

講演の記録はアカデミーのホームページをご参照願うが、ここではいくつかのポイントを指摘しておきたい。

第一は、国際交流事業をすすめる「心」である。石塚氏は、「言葉で通じないところを真心で補う」という姿勢を最初から最後まで貫いた。そのあらわれが、どんな時にも訪問者を最大限の「おもてなし」の心で接することを、組織に率先垂範で徹底していったことである。区を挙げてお迎えするという姿勢の成果として、外務省や東京都も板橋区には一目置くようになり、区を訪問する外国人が年々増加したといえよう。

第二は、交流対象先の多さである。平成元年のカナダ・バーリントン市を皮切りに、平成６年のマレーシア・ペナン州、平成８年のモンゴル国文部省、平成９年の中国・北京市・石景山区と続々と交流の幅を広げ、平成 17 年のイタリア・ボローニャ市に至って、合計５都市・国との公式交流が展開されることとなったのである。初めから意図したかどうかはともかく、交流の機会を積極的にとらえた結果、この数と国レベルも含めた交流が実現したという点が、懐の広さとして全国的に板橋の名を轟かせている要素であろう。

第三に、議会との関係である。区議会には、幅広い政党・会派があり、先方の国家体制等への懸念や財政負担などから、国際交流事業に全面的賛成とはなりづらい面もあった。しかし、石塚氏はその手腕を議会対応にも十分発揮し、交流事業の目的・メリットを掲げつつ早い段階から議会との連携・協働を進めた。そうした点から、板橋区では区長・区議会・さらに区民関係団体も交えた幅広い層による交流事業が実現できたといえよう。

以上、石塚講演について筆者なりの視点からコメントさせて頂いた。一人の政治家の足跡をたどる中で、当アカデミーの掲げる東アジア圏の共生共栄促進にも参考になったのではないかと考えるものである。

（当アカデミー理事）

下の画像は講演会のポスター↓

日韓トンネル研究会講演

永野慎一郎代表は、2013 年６月５日（水）、アルカディア市ヶ谷私学会館で開催された特定非営利活動法人日韓トンネル研究会総会において『「日韓新時代のための提言/アジェンダ 21」と日韓トンネル』と題して講演しました。

公益社団法人中央日韓協会講演

永野慎一郎代表は、2013 年６月 22 日（土）、公益社団法人中央日韓協会に招かれ「相互依存の日韓関係　成熟した関係を目指して」と題して 講演を行いました。

活動報告②

木浦大学と日韓共同ワークショップ

2013 年 11 月 6 日、東アジア政経アカデミーと韓国国立木浦大学臨海地域開発研究所の共同主催の 2013 Korea-Japan Joint Workshop が木浦大学のセミナー室で開催されました。朴成賢博士の司会で、申順浩木浦大学教授の開会の挨拶に続き、永野慎一郎代表が**「陸地棉栽培の歴史と棉花の新成長産業の可能性」**と題して主題発表しました。永野代表の報告内容は以下の通りです。

1．研究目的及び趣旨
2．韓国の陸地棉栽培の沿革
3．総督府の棉作奨励政策
4．陸地棉栽培奨励が棉花産業に及ぼした影響
5．棉花の新成長産業可能性分析
6．結び：新成長産業育成のために

統計資料などに基づき、韓国において陸地棉栽培の歴史を説明しました。韓国における陸地棉栽培は 1904 年に当時の木浦駐在日本国領事若松兎三郎によって、木浦対岸の高下島において試験栽培したことから始まっています。その後、朝鮮半島全域に普及し、戦前は棉業が主要産業として発展しました。しかし現在は、全く栽培されていません。韓国南部は陸地棉栽培に適する気象条件であり、棉（cotton）は環境に優しく健康にも良いだけでなく、未来志向の農産物であることを活用して陸地棉を再び栽培し、棉関連商品を開発して新成長産業として育成してはどうかと問題提起しました。

永野報告に基づき、木浦大学の金衡模教授（経済学）、郭秀年教授（園芸科学）、姜声国教授（食品工学）、姜鳳龍同大学島嶼文化研究院長、金龍浩全羅南道園芸特作担当官、権容弼木浦市観光課担当官、裵相木（農村振興庁バイオエナージ作物センター研究員）、丁秉春韓国 AGRI-WELLBEING 研究所代表（前木浦農事試験場長）、曺瓊鈴草堂大学兼任教授など各分野の専門家が討論に参加し、様々な側面から意見が述べられ、活発な討論が行われました。棉花栽培には多くの労働力を必要としていることから、経済性についても研究が必要であるという意見が出されました。しかし、非常に有益な研究なので、産業化のためには障害要因は何か、推進するためにはどのようなアプローチが必要なのか、様々な角度から調査・研究が必要であるという意見がありました。

（下の写真は木浦大学でのワークショップ風景。）

陸地棉試作地木浦高下島訪問

永野慎一郎代表は、2013 年 8 月 27 日、丁鍾得木浦市長を訪問し、木浦市との交流について意見交換した後、同市観光課職員の案内を受け、韓国における陸地棉の発祥地高下島を訪ねました。高下島は 1904 年に木浦駐在日本国領事若松兎三郎が日本から米国種の陸地棉の種子を取り寄せして、試験栽培した試作地として知られています。試作の成功によって、東京に棉花栽培協会が設立され、同協会の支援によって、陸地棉栽培が朝鮮半島全域に広がり、棉業が当時主要産業と発展した経緯があります。陸地棉試作地付近には、「朝鮮陸地棉発祥之地」という記念碑（1934 年建立）があり、石碑裏面には「明治三十七年木浦駐在大日本帝国領事若松兎三郎氏此地二初メテ陸地棉ヲ試作ス」と刻まれています。（横面には朝鮮総督宇垣一成書と書いてあります。）

最近、木浦市は陸地棉発祥地を観光地に指定し、昨年 5 月に約 700 坪の市有地に棉花畑を造成して、いまや忘れかけている棉花を一般市民、特に、幼稚園児生や小学生たちの体験の場として活用しています。丁鍾得市長の肝いりで、若松領事が試作してから 109 年ぶりに高下島において再び棉の花がみられるようになりました。やがて高下島は陸地棉発祥地としてだけでなく、“産業発祥地”として訪れる遺跡になることを期待しています。

また、木浦市は旧日本領事館の展示室の中に陸地棉発祥に関する資料展示コーナーを設けることになりました。（今春オープン予定。）

【写真説明】
上（左）：陸地棉研究発祥地記念碑
上（右）：高下島陸地綿試作地の棉花畑
下：朝鮮陸地棉発祥地記念碑

活動報告③

第 7 回日韓政策フォーラム

東アジア政経アカデミー、早稲田大学アジア太平洋研究センター及び韓国統一研究院の共同主催の第 7 回日韓政策フォーラムが 2013 年 12 月 3 日（火）午後 1 時 30 分～6 時に早稲田大学 19 号館 710 号室で開催されました。「北朝鮮・金正恩体制 2 年の評価と日韓政策協力」をテーマに日本と韓国の朝鮮半島問題専門家が集まって活発な討論が展開されました。永野慎一郎代表は第 1 セッションの司会を務めました。会議の途中、北朝鮮において張成澤国防委員会副委員長の粛清のニュースが飛び入り、急遽この問題が話題となり、参加者たちを慌てさせるハプニングもありました。何が起こるか分からない北朝鮮情勢を印象付けるものでした。

木浦市立舞踊団大阪公演

2013 年 12 月 8 日、大阪堺市の国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）で、木浦市立舞踊団公演が行われました。この公演に合わせて、丁鍾得木浦市長が来日し、堺市役所を訪問し、竹山修身市長はじめ同市幹部たちと懇談しました。堺市は日曜日にもかかわらず、木浦市長一行を迎え、両市のトップレベルの交流を深めました。日韓関係が不正常な時期こそ地方レベルでの交流が重要であるという認識に一致しました。

約 1000 人が入る会場は超満員であり、黎明の光―太平舞、年少踏青―愛の歌（舞）、舟唄－25 弦伽耶琴、カンガンスルレ、女舞―チャンハンガ、蓮花舞、春香伝―愛の唄（パンソリ）、大地の響き―五鼓舞のプログラムを披露して、満場の拍手喝采を浴びていました。韓国の伝統芸能の素晴らしさに感激した聴衆も多いと思われますが、木浦市という地方都市の舞踊団のレベルの高さにも驚いたようで、この種の公演を何度も見たけれども、こんなに素晴らしい公演は初めてだという周囲の人たちの感想でした。木浦市は芸術の都市として知られており、市が予算を割譲して 6 つの芸術団体を育成していると木浦市長のコメントがありました。

会員からの便り ①

「普通」の人間と「普通」の国家

国士舘大学教授　申　景浩

最近、「普通」という言葉がよく目に入る。「普通」とは何か。改めて辞書を調べると、「ひろく一般に通ずること。どこにでも見受けるようなものであること。なみ。一般。」（広辞苑）とある。

ふと「普通」という言葉で、韓国の元大統領、盧泰愚氏を思い出す。韓国では長い間、軍出身の大統領により、市民への抑圧と弾圧が続いていた。彼もまた軍出身ではあったが、大統領選（1997 年）では「私は普通の人」と言い、一般市民の方に歩み寄ろうとした。彼の言動は色々な憶測を呼んだことは間違いない。しかし、振りかえってみると、市民による大統領直接選挙を容認していたし、大統領の在任中（1988 年～1993 年）は東アジアの安全と平和のため、外交に力を注ぎ、また国内においては韓国の民主化に大きな礎を築いたことは認めてよかろう。恐れられる存在から少しではあるが、親しみのある、「普通」の存在になったのである。

ところで、日本の安倍総理の「日本を普通の国家にするために……」という発言の中にも「普通」がある。その実現のためか、憲法改正や集団的自衛権の拡大解釈などへの意欲が滲み出ているのである。それによって長年抱いてきた隣国の不信感と恐怖心は、募るばかりである。美しい、歩み寄れる「普通」の日本ではなく、ますます隣国との隔たりは深まる「異質で特別な」日本になるのではないだろうか。「ひろく一般に通じて、どこにでも見受けるような」国家とは到底思えないのだが、初老のつぶやきだと思ってくれれば、幸いである。

（当アカデミー理事）

アカデミー会員募集！

当アカデミーは、2010 年 9 月 27 日、東京都知事によって特定非営利活動法人として認証されたＮＰＯ法人です。東アジア地域（韓国・中国・台湾等）の産・学・公の機関との共同研究、セミナー及びフォーラム等を開催し、講演会などを実施しています。また、東アジア地域の産業構造の実態調査、各種研修団の派遣や受け入れなどの業務を行ない、相互の交流を通じて、理解を深めることで地域の平和と安定、共生共栄への道を開くための橋渡し役をしています。

以上の趣旨に賛同し、入会を希望される方はご連絡ください。

会員は正会員と賛助会員の二種類あり、正会員は活動に参加するメンバーであり、賛助会員は財政的に支援するメンバーです。

入会金：正会員・賛助会員　5,000 円
年会費：正会員（個人・団体）5,000 円、
　　賛助会員（個人・団体）一口 20,000 円

会員からの便り②

サハリン紀行

日向寺淳一（健康文化会医療労働組合書記次長）

サハリン、現在はロシア領。1945 までは樺太と呼ばれ日本領(北緯 50 度以南の南樺太)だった。ソ連崩壊の 1992 年までは、一般人が立ち入ることのできない地。稚内育ちの私には、対岸に見える島影は、自由に行き来できないことから、神秘的なものを感じてきた。樺太からの引上げ者にとっては、まさに望郷の地である。日本最北端の宗谷岬からサハリンの最南端まで 43km の距離。天候が良ければ島影が見渡せる。

稚内とサハリン航路は、1911 年に日本郵船が稚内ー旧樺太大泊間定期航路が開設。敗戦の 1945 年までつながっていた。それから 44 年後の 1989 年に不定期便が就航。1995 年に定期航路が半世紀ぶりに再開。1997 年から一時運休するも 1999 年から定期航路再開。現在に至る歴史がある。

2013 年 7 月 30 日から 8 月 2 日の 4 日間、アジア交流ネットワークの一員として、永野慎一郎先生ともにサハリンを訪れた。稚内港からフェリーで 5 時間 30 分の船旅。日本を旅してサハリンに帰るロシア人客も多く、あちらこちらで交流の輪が広がっていた。夕方、宗谷海峡を抜けてコルサコフ(旧大泊)に着く。現在、72 時間滞在はビザ免除が適用され、私たちもこれを利用した。通関後、バスにて州都ユジノサハリンスクに向かう。車窓からは、拓銀大泊支店の建物がひっそりと見える。

約 1 時間でユジノサハリンスクに到着。この街は、日本領時代は豊原と呼ばれ、人口は約 18 万人。日本でいえば中規模の地方都市。郊外には、大型ショッピングセンターやシネコンなどが立ち並ぶ。街並みもソ連時代の画一的な灰色からカラフルな色彩が眩い。経済が良くなっている印象を受ける。

市民の憩いの場「ガガーリン公園」は、人類初の有人宇宙飛行を成し遂げたガガーリンにちなんで名付けられた。公園内は巨木が立ち並び、自然を生かした造りとなって、中学生たちが花壇を整え、子供連れの親子で賑わっている。栄光広場には、戦車と大砲の記念碑。「日本への勝利」が刻まれている。駅前の勝利広場に巨大は「レーニン像」がそびえ立つ。ソ連時代を懐かしむ人々が多い一方、金ぴかのロシア正教会も再建がすすみ、若い信徒が礼拝している姿も目立つ。旧樺太時代の面影は、拓銀豊原支店は美術館。豊原市役所や陸軍病院など幾つか残っている。樺太庁博物館は健在で現在も「博物館」として活躍中。かつての樺太神社は参道が残るのみ、旧王子製紙の工場は、ソ連時代まで稼働していたが、現在は朽ち果て寂しさを感じる。全体としては、日本統治時代の面影は、ほとんどないといってもいいくらいである。

サハリン全体の人口は約 50 万人。その 77%がロシア人、次に韓国・朝鮮人が 6.6%、そして日本人が 219 人いる(2010 年)。今回、残留日本人の松崎節子さんと韓国人の徐ジュガイさんの二人に面会できた。

松崎さんは、戦前に樺太にきたものの貧しく学校にも通えず、敗戦後、生きるため 16 歳で結婚させられ、3 児をもうけたが 2 人亡くし、その後、日本への帰国はあきらめ、再婚して今は幸せという。敗戦後、多くの日本人女性が朝鮮人と結婚させられ、日本への帰国が絶たれたことはあまり知られていない。また、反日感情も強かったため、引き揚げることができなかった残留日本人は、日本語での会話をタブーとし、韓国人や朝鮮人を装った人も少なくなかったという。敗戦により日本人と朝鮮人との立場が逆転し、家族を守るためにやむを得なかったかもしれないが、残された当人の苦労は想像を絶するものだったと思う。韓国人の徐さんも樺太生まれ。おじいさんが戦前に釜山から樺太に移住。三代にわたって王子製紙の職工として働いた。敗戦で日本人でなくなったことに衝撃を受けた。1946 年に朝鮮学校を設立され、入学したが朝鮮語が全く分からなかった。その後、大学に入学を経て師範学校へ、朝鮮民族の歴史と文化を伝えたいと教師となった。韓国籍も取得して、一時は韓国へ帰ることも考えたが、妻に反対されたため残っている。サハリンの朝鮮人は、1931 年の日中戦争がはじまると労働力として「応募」、「募集」、「徴用」という名で集められ、6 万人（推定、北海道新聞社調べ）を数えるようになったという。敗戦後は、日本人でなくなったため、祖国に帰ることもできず「棄民」とも言われた。そうした激動を経験した二人は、恨みを語らずにサハリンで生き抜いたことを誇りのように話していたことが印象に残った。

宮沢賢治が亡くなった妹の魂を追ってたどり着いたという「栄浜」に足を延ばしてみた。ユジノサハリンスクから北へ約 50km、ドリンスク(旧落合)に近いオホーツク沿岸の村。周りには、数戸の漁業倉庫が見えるだけの寂しい砂浜で、観光に訪れる人は稀という。それでも私たちのグループは、砂をかき分けて探し物に熱中した。それは「琥珀」だった。石炭層のこの地域は、波に洗われて琥珀が打ち上げられ、地元の人々も採取するというのである。私も約 30 分間に片手ほどの琥珀を採取した。宮沢賢治は、サハリンの旅で「銀河鉄道の夜」の構想を得たといわれるが、この「栄浜」がどのような影響を与えたかを知る手掛かりは全くない。

3 泊 4 日の短い旅であったが、日本人が訪れることが少ない「サハリン」は、歴史、民族、気候などで深く考えさせられるものだった。サハリンの経済は、石油や天然ガスの採掘やロシア政府の投資もあり、初めて訪れた 2000 年より、はるかに向上している。そのため物価の上昇の著しく、ロシアでは 4 番目に高いという。庶民の暮らしも良くなっているようだが、格差が広がっているように思えた。東京に戻り、サハリンの話をすると、北方領土と勘違いしている人が多いことに愕然とする。一般的な観光地としては、なじみのない地だが、奥深い地であることは間違いない。費用は、高めなのが残念だが、ぜひお奨めしたい地でもある。

（当アカデミー監事）

会員からの便り ③

心の故郷(ふるさと)江景の家

公益社団法人中央日韓協会理事　薄葉威士

２０１３年の８月、全州の韓国人の友人と一日かけて群山めぐりをした。友人のお父さんが車を運転手つきで提供してくれたので、十分に群山を楽しむことができた。そして夕方、全州に戻るとき、友人に無理を言って江景に寄ってもらった。江景…高麗時代から李朝朝鮮時代にかけて市場として発展し、近代になっては錦江水運の拠点として栄え、日本人街も築かれた。今は塩辛で有名である。

その旧日本人街、現在は歴史から取り残されたように無人の日本式住宅も多く、ひっそりとしている。その旧日本人街のはずれに私の心を摑んで放さない小さな住居(商店)がある。一部２階建て、道路に面した部分が一部コンクリート造り。今は無人・廃屋。しかし、この建物に何故か私は引きつけられ、何回ここに来ただろう。ただこの家屋を眺めるためだけに。

建物は土台から傷んで、もう人は住めそうもない。一時は買い取って復元しようかとまで考えたことがあったが、物理的に買い取ることはできても、修理・復元するにはその何倍もの費用がかかるだろうし、外国人が買い取る、しかも日本人が買い取るということにどんな反応があるか。いずれにしても私にとっては“かなわぬ恋”の対象のようなものだ。

この住居、終戦時に引き揚げたであろう日本人から引き取った韓国人、どんな人で、この家屋のたどった歴史、商店として使われたのか普通の民家として使われたのか。おつき合いしたい女性の過去を知りたいような知りたくないような、そんな感じだ。ただ、２階の「大同電気商会」という屋号だけはずっと残されたまま。

もう一つ気になる日本式家屋、木浦の旧木浦日本領事館のすぐ近所にある小さな教会(だった)。削り取られて教会名もほとんど読めない。今は近所のコンビニの倉庫として使われている。ここも、行って見るたびに涙が出てくる。

この二つの日本式家屋は私にとっての韓国での「昭和」の名残り。これが取り壊されるか(決して望んではいないが)あるいは復元されるかすれば、私にとっての江景、木浦の「昭和」は終わりになるだろう。

（当アカデミー理事）

写真は韓国忠清南道論山市江景邑市街地の古い建物

韓国の恩師と兄貴の来日

SPM研究所代表　佐々木憲文

2013 年 11 月、恩師・金正年先生と梁埈永兄が、昨年他界した義母の納骨式に来日くださいました。妻も帰国しましたが納骨式が終わった翌日に韓国に戻り、後は男三人で久々の交流を満喫しました。

金先生の講義に出た回数は少なく（だから落とされ！）、酒席にご一緒させていただく機会が多かった遊学生活で、教え子中、最もできの悪い弟子であろうと自覚しております（弟のように可愛がってくださる奥様も、「その通り」と愛情溢れる微笑を浮かべて断定されます）。先生の下からは優秀な人が輩出しているので、開き直って「私のような人間もいていい！」と先生に首肯を強要し、周りから苦笑されています。

梁兄は、以前に籍を置いた姉妹研究所の先輩研究者で、30 年のつきあいになります。まじめに韓国語を習おうとする私を、「言葉は実践が大切」と毎日酒場へ拉致して楽しく学ばせてくれました。だから語学研究所の先生との挨拶は、「アンニョンハセヨ」ではなく「オレガンマニムニダ（お久しぶり）」でした。いまだに酒が入らないと韓国語がうまく出てこないのは、梁兄の深い情のせいなのです。

「君の親なら私にとっても親」と納骨式に来て下さった、金先生と梁兄。時に政治や経済の話になり、激論になることもあります。ただそれぞれが、韓国・日本という図式ではなく、一個の人間同士として語り合うので、示唆に富む参考意見となり貴重な刺激が受けられます。いま、日韓関係が非常にぎこちない時期ですが、政治家やマスコミも、個と個の人間関係の構築からはじめれば、ずいぶん違った日韓関係（日中関係も）になるはずです。自分とは違うからこそ貴重であり、大切なのだと思われます。

妻たちは、男三人だけだからと心配したようですが、鄙びた温泉で英気を養い、多少のアルコール栄養剤の助けを借りたとはいえ、信頼関係を深める貴重な日々を送っていたのです（言いわけ？）。今年もよい年でありますことを祈念いたしまして…。

（当アカデミー監事）

■編集後記

昨年は、国内的には一部景気回復で湧いたものの、国際的には日中・日韓関係共に緊張が走り、年末には安倍総理の靖国参拝が米国からも批判される等、問題の多い１年でした。それだけに国際融和を目指す EAPEA から 1 年ぶりにニュースレターを発行できたことは大変意義深いことだと思います。いつものことながら御玉稿をお寄せ下さった関係者の方々には厚くお礼申し上げます。2014 年こそは国際融和の年になりますように！（大杉由香）